



取組のかたち

音楽療法・調理体験・心理支援を
組み合わせた孤独・孤立予防の取組

届けたい人たち

不登校や高校中退などの経験から、
社会との距離を感じている若者
地域の中で役割や居場所を
見出しにくくなっている高齢者

私たちの軌跡

私たちはフリースクール、高校、カルチャースクールを運営し子供から高齢者まで幅広い世代と日常的に向き合っている。不登校や自信を失った経験を持つ生徒の、学力や出席日数だけでは測れない背景や思いに寄り添い、学習だけでなく料理や音楽を通して自己肯定感を育み、「できない自分」ではなく「できた経験」を積み重ねる教育を大切にしてきた。料理や音楽等の体験的な学びは言葉による指導以上に自己肯定感の回復に繋がり、生徒が表情を取り戻し人との関わりを前向きに捉えるようになる姿を多く見てきた。こうした取組を通じ孤独や孤立は誰にでも起こり得る身近な課題であると実感し、今回の取組に繋がった。

私たちの新たな取組

音楽療法カウンセラーと音楽・料理指導者、公認心理師による、音楽セッションを中心に、調理体験と心理相談を組み合わせた複合的なプログラムを実施した。音楽セッションでは、音を通じて感情を表現し、他者と関わる体験を重視した。「音楽×食」プログラムでは、ポークカレーやワッフル、スムージー作り等の調理体験を行い、参加者同士が自然に協力しやすい環境を整えた。そして、調理後共に食事をする事で会話が生まれ、参加者同士の関係性を深める機会を提供した。更に、公認心理師による相談日を設け、悩みを安心して言葉にできる支援体制を構築し、専門性と日常性の両立を図りながら、孤独・孤立を予防する取組とした。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

私たちは、不登校や高校中退を経験した若者、孤独・孤立を感じる人と関わる中で、支援が必要になる前に人と繋がれる場所が少ないこと、支援を求める前段階での予防が重要であること、言葉で気持ちを説明することが苦手な人ほど孤立になりやすいことを感じていた。これに対し、言葉に頼らず感情や思いを表現できる「音楽や食」に可能性を感じたことが、この取組の原点である。これまで、音楽や料理教育を行い「音楽や食が人の表情を柔らかくする瞬間」を何度も目にしてきた中で、音楽や食を通じて、孤独や孤立を予防できるのではないかと思い、既存の取組に音楽療法という専門性を取り入れることで、本事業を始めた。

立ち上がった壁と、乗り越えた日々

最初の課題は「参加のハードル」だった。「音楽療法、居場所」と聞くと、構えてしまう方もいた。そこで、専門性を前面に出さず「音楽に触れる時間」「一緒に作って食べる時間」等、親しみやすい表現に変えることで、日常の延長線上として気軽に参加できる場にしていった。また、参加者の体調や気分により、計画通りにいかないこともあった。そこで、「その日の雰囲気」を最優先にする等、参加者主体の柔軟な運営へと方針を切り替えた。こうした工夫により参加者の安心感が高まり、参加しやすい環境へと繋がっていった。このことは、今後活動を継続・発展させていく上でも大きな学びとなった。

取組の成果

本事業の延べ参加人数は155人にのぼり、高校生から90代までの幅広い世代が集う取組となった。言葉で気持ちを表現することが難しい参加者であっても、音楽や食を介することで無理なく気持ちを表現でき、他者との距離が徐々に縮まっていく様子が見られたことや、若者と高齢者が自然に協力し合う関係性が生まれたことは大きな成果である。今後は、本事業で得られた知見を活かし、また、行政や福祉機関との連携をさらに深め、地域に根づく居場所として音楽療法・食・心理支援を組み合わせた取組を継続し、一人でも多くの人が孤独・孤立状態を予防できるようにすることが、私たちの目標である。

団体概要

団体名	総合カレッジSEO
代表者	瀬尾 陸奥
設立年月	1972年4月
住所	富山県砺波市出町中央6-9
ホームページ	https://www.seo-school.com
メッセージ	孤独や孤立は、誰にでも起こり得る身近な問題ですが、支援を受けることは高いハードルがあるのも事実です。私たちは、そうしたハードルを下げるために、音楽や食といった親しみやすい活動を通じて、孤独・孤立の予防に繋がる活動を行いました。今後も音楽と食を通じて、不安を抱える人が気軽に訪れ、孤独・孤立を予防できるよう、活動を続けたいです。

取組の様子



調理体験



楽器体験



心理相談会



取組のかたち

つながりの場づくり
支え合える地域づくり
ともに取り組む仲間づくり

届けたい人たち

誰かと話したい・つながりたい、
ほっと一息気分転換したいと感じている
広域避難者の方々および地域住民の方々

私たちの軌跡

能登半島地震により、慣れ親しんだ土地を離れ、金沢市近郊で暮らす高齢の広域避難者の社会的孤立が深刻化している。本事業では「社会的処方」のアプローチを活用し、地域の多様な主体と連携しながら、広域避難者が集い、つながり、交流できる場や機会づくりを行った。これにより、広域避難者による新たなコミュニティ形成や自発的な地域活動への参加につなげる取組を実施した。主な活動は①居場所機能を持つ交流型イベント「笑語(わらかた)ひろば」の定期開催、②市民リンクワーカー(以下、LW)の発掘・協働、③LWによる「出会う・つながる・つなげる」活動を通じた、広域避難者のコミュニティ形成と地域参加の促進である。

私たちの新たな取組

これまでの実践を更に深め、広げる取組として、以下を実施した。

- 【深める取組】・広域避難者の方々の主体性を後押しする場づくり
・LWの活動を通じたコミュニティ形成・地域参加の促進
- 【広げる取組】・未だに「笑語ひろば」を届けることができていない方々への情報発信/アウトリーチ強化
・地域の団体/事業者/市民の更なる巻き込みによるコミュニティの輪の拡大

“来る人”から“関わる人”へ

震災から1年が経過した頃より、自分にも何かできることはないかという声が広域避難者の方々から聞かれるようになった。一人ひとりと丁寧な対話を重ね、それぞれの「小さな願い」に耳を傾けながら、「笑語ひろば」の中で、能登の方々自身が主体となって願いを形にできる場づくりを行った。その結果、12月より能登の方々企画・運営の担い手となる場「笑語ひろば やわやわ」を立ち上げ、以下の企画を開催した。

- ・震災前に輪島市で菓子店を営んでいた70代女性によるお菓子づくり教室
- ・「男性が参加しやすい場をつくりたい」という60代男性とともに立ち上げた「おやじの会」による企画

共に進む仲間をつくるための工夫

実践を重ねる中で、メディア露出やLW、協働団体からの声掛けを通じ、地域団体、自治会、地元事業者、市民が「笑語ひろば」に参加。広域避難者の方々との交流を通じて能登に対する意識の変化や本取組への共感が生まれ、地域の方々が自身の得意分野や強みを活かして活動に参画する流れが自然と形成された。本取組は多様な主体が役割を持ち寄り共に担う「協働のプラットフォーム」として機能し始めている。現在では地元企業、学校、地域のサークルコミュニティにも輪が広がりつつある。更に、地域の様々な主体やLWによる活動を資金面から支えたいとの声がコミュニティ財団から寄せられ、協働に向けた対話も進んでいる。

取組の成果

アンケート調査(有効回答170件)の結果、98%が高い満足を示した。同郷の人同士で集える、LWと気軽に話せる、能登をテーマにした交流・体験ができる点が参加者にとって安心感、信頼感、元気が得られる場として機能していることが確認された。回答者の100%が継続参加を希望、82%が「笑語ひろば」を通じて新たな知人・友人が増えたと回答。

現在10名のLWが活動している。本事業を機に自ら任意団体を設立し広域避難者向け居場所づくりを開始、能登をテーマに多世代交流活動を開始する等、地域づくりの担い手として新たな実践が生まれている。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 クロスフィールズ
代表者	小沼大地
設立年月	2011年5月
住所	東京都品川区西五反田3-8-3 町原ビル4階
ホームページ	https://crossfields.jp/programs/co-create/
メッセージ	私たちの活動の詳細や具体的な効果、そこから得られた示唆について発信しております。ぜひご覧ください。2026年6月頃にも活動報告会を開催予定です。 https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000044.000049241.html

取組の様子





取組のかたち

行政連携による食料支援を通じた
孤独・孤立対策

届けたい人たち

生活困難者や独居高齢者
ひとり親世帯等
失業者

私たちの軌跡

令和6年能登半島地震をきっかけに、フードバンク団体が存在しなかった奥能登地域に拠点を構え、全国から寄せられた支援物資を被災地に提供。能登半島地震と奥能登豪雨により急増している生活困窮者、支援が必要な高齢者、ひとり親世帯等の支援を必要とする人々に対し、食料支援及び物資支援を展開した。また、災害により断絶した地域コミュニティの再構築の為に、居場所づくりや訪問活動に対し食品を提供し、被災地支援に取り組んだ。

私たちの新たな取組

フードバンク団体が存在しなかった奥能登地域において、行政や社会福祉協議会と連携して生活困窮世帯を支援する仕組みを定着させ、能登半島地震と奥能登豪雨により急増している生活困窮者、支援が必要な高齢者、ひとり親世帯等の支援を必要とする人々が見落とされない地域社会を創出する。震災後の若年層の都市部への流出や長期間の自宅を離れた仮設住宅での生活により、地域コミュニティのつながりが低下した。地域に対し食品を提供することで、地域コミュニティの再構築のきっかけを作り、孤独・孤立対策に取り組む。

つながりを力に—連携の工夫

フードバンク能登に寄付された食品は、被災地の困っている人に届けてほしいという寄付者の思いが込められている。その寄付者の思いを繋げるためには、行政や社会福祉協議会などと連携し、困難を抱えた人を特定した食料支援が必要だった。そのため、行政や社会福祉協議会の職員の方々に、フードバンクの利活用について共通の認識のもと食料支援を行う関係作りを心掛けた。各市町で開催されている災害連携会議に参加して情報を共有し、食品の在庫状況を隔週でお知らせする発信を継続している。そのほか、チャットアプリ(LINE)や電話でリアルタイムの相談ができる体制を構築した。

この取組があったからこそ

能登の被災地で活動しているフードバンクの為に、食料支援を求める人々の中には、災害で住居も仕事も失い、新たな地域での生活になじめず困難を抱えた方が存在している。先の見通しが立てられず、途方に暮れる受益者からは食料支援が助かる、励みになるという声が寄せられ、連携している行政や社会福祉協議会からも、フードバンクから提供した食品が、支援が必要な人との信頼関係作りに役立つと、評価を得られている。震災から2年経つが、復旧も半ばで支援が必要な人が未だ多い状況である。今後もフードバンク事業を通して、食料支援・地域コミュニティの再構築に尽力していく。

取組の成果

本事業により、行政や社会福祉協議会の生活困窮者支援担当課からの支援依頼により、延べ94世帯分の生活に困窮した世帯の食料支援が実現した。また、能登地域の個人の方からご寄付いただいた寄付件数は12件で、能登の学生が地域住民に呼びかけて集まった食品は、合計204品、重量にして38kgの食品寄付が集まる。また、ボランティアとしてフードバンク活動に参加した地域住民は1月27日時点で延べ91人が参加している。今後も増加が見込まれる能登の食にお困りの人々を、地域住民が一丸となって支える地域作りを行っていく。

団体概要

団体名	フードバンク能登
代表者	上野 香苗
設立年月	2024年10月
住所	石川県鳳珠郡穴水町川島キの106
ホームページ	https://foodbanknoto.org/
メッセージ	被災地の食料支援が必要な人を、地域の皆さんで支え、被災した誰もが必要な支援に繋がる事ができる地域として復興できればと思っています。

取組の様子

- ◆ 能登地域の学生に対しフードバンクの普及啓発を実施し、高校生らが地域住民に対しフードドライブを実施。
- ◆ 生徒の呼びかけで、食品がたくさん集まる。



- ◆ ボランティアの方々とともにフードバンク活動に取り組む様子





取組のかたち

居場所づくり
自然体験プログラムの提供
地域支援ネットワークの構築

届けたい人たち

不登校の子ども

私たちの軌跡

中山間地域において、学校外の居場所や相談窓口が不足し、子どもたちの孤独・孤立が深刻化している現状があった。
岐阜県揖斐川町を拠点に、不登校の子どもたちを対象としたユースセンターを運営している。
山林(根尾川むいむいの森)や屋内施設(むいむいの家)を活用し、自然体験プログラムやプロジェクト型学習を通じて、子どもたちが安心して過ごせる居場所を提供している。
定期的に毎週月曜日に開催。年間1,000人が利用している。

私たちの新たな取組

これまで毎週月曜日のみだったユースセンターの開所日を、新たに毎週金曜日に増設し、支援機会の拡大を図った。
利用者が分散されることで、金曜日はより少人数で「静かにゆっくり過ごしたい」というニーズに応える場となった。ゆとりある時間の中で、子ども達のリクエストに基づいたプロジェクト型学習を臨機応変に実施した。
また、近隣団体との共同イベントやケース会議を通じて、地域における重層的な支援体制を作った。

共に進む仲間を作るための工夫

単独の団体では限界がある支援を、地域全体で支えるため、近隣の不登校支援団体とのネットワーク構築を強化した。具体的には、不登校支援を行う近隣の2団体との定期的な「ケース会議」を開催した。会議では、「同じ子どもでも居場所によって見せる姿が異なる」という気づきを共有し、家庭や学校での様子も含めた多角的な情報交換を行った。
合同での「ふれあい乗馬」「遠足」などのイベントを通じ、スタッフ同士の顔の見える関係性と、支援の質の向上を図った。

素の自分でいられる心地よさ

月曜日は約十数名が参加する活気ある場だが、中にはその賑やかさに気疲れしてしまう子もいる。金曜日という「もう一つの選択肢」が生まれたことで、少人数でゆったりと時間が流れる静かな環境を選べるようになった。普段は周りに気を遣って一步引いている女の子が、穏やかな空気の中で「本当はやってみたかった」という想いを口にし、じっくりと焚き火に向き合って火を熾すことができた。
また、図書館が空いている金曜日に行動できたことで、自分の興味(漢字など)を誰に急かされることなく深める時間も生まれた。こうした時間の積み重ねが、子どもたちの安心感と自信を育んだ。

取組の成果

夏・冬2回の他2団体とのケース会議により、特定の場だけでは見えにくい子どもの多面的な姿を把握できた。学校や家庭での状況も踏まえた情報共有を行い、役割を分担した重層的な支援体制の意義を再確認し、知見は県内のネットワークにも共有した。今回新たに金曜日にユースセンターを開所した。合同イベント等を含む合計25日の開所により、延べ約260人が利用。特に予定を固定しない日は、スタッフが一人ひとりの話をじっくり聴くことができ、遠慮しがちな子の主体性が育つ瞬間を捉えることができた。今後はこの連携基盤を活かし、行政・企業協力や寄付を通じた持続可能な運営を目指す。

団体概要

団体名	一般社団法人よだか総合研究所
代表者	小池 達也
設立年月	2016年3月
住所	岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲長瀬878
ホームページ	https://yodaka.org/
メッセージ	焚き火の火をじっと見つめたり、好きな本を心ゆくまで探したり。一人ひとりの「ありのまま」が、ここで静かに輝き出すことを願っています。 地域の豊かな自然の中で、子ども達が「やりたい」にじっくり向き合い、自分のペースで羽を休められる居場所を目指しています。

取組の様子



合同イベント ふれあい乗馬

合同イベント 遠足



プロジェクト型学習 草木染め





取組のかたち

社会との繋がりが希薄な若者や低所得の外国人を、子どもの居場所になる駄菓子屋さんで雇用することで、繋がりを作る

届けたい人たち

孤立する若者、外国人、地域の子ども達、地域住民

私たちの軌跡

名古屋市中区にある中文化センターにて地域こども食堂「おばちゃん食堂」を運営するNPO法人である。利用する子ども達の日々の需要に応えるために理事が開いた飲食店「実家の台所」でも、2024年からこども食堂「実家パーティー」を開設し、住みよい新栄千早学区を目指して活動している。

私たちの新たな取組

2024年よりこども食堂を運営している飲食店「実家の台所」のアイドルタイムを活用し、毎週木曜日(14:30~17:30)に駄菓子屋を開催。安価に駄菓子を提供し、子ども達が気軽に立ち寄り、安心して過ごせる居場所を提供する。同時に、社会との接点が希薄な若者や外国人をスタッフとして雇用し、就労の場を創出。地域社会と関わりながら働くことで、孤独や孤立を未然に防ぐ一助とする。子ども、若者、外国人、そして地域住民が等しく集い、支え合える多世代交流拠点の構築を目指していく。

見つけた私の居場所

常時15~40名の子ども達が集い、それぞれが自由に過ごす場へと成長した。居場所として定着したことで、開催時間外でも子ども達がふらりと立ち寄るようになっていく。困った時に頼れる場所、友達と安心して過ごせる居場所になっていると感じている。スタッフとして雇い入れた若者や外国人の2名も、活動を通じて自身の役割を見出し、心境の変化とともに前向きに人生を歩み始めている。みんなの居場所、みんなの拠り所として機能する一方で、社会福祉協議会などの専門職の方が訪れ、課題を抱える子供たちの状況を見守る場所にもなっている。

取組の成果

駄菓子屋は延べ842名が利用。子ども達と関わる時間が長くなったことで親密度が高まり、より詳細な家庭状況を把握できるようになった。その結果、支援が必要な家庭の情報を3件、社会福祉協議会と共有することができた。また、雇用した2名のスタッフにも前向きな変化が表れている。フリーターだった若者は、子ども達に頼られることで大人としての自覚が芽生え、大学進学を決意した。シングルマザーの外国籍スタッフも、子連れで働くことで孤独感が解消されつつある。さらに、近隣の独居高齢者も時折顔を出し、不器用ながらも子ども達の面倒をみている。今後もこうした縁を広げ、誰もが助け合える地域作りを推進したい。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人新栄千早おせっかいおばちゃん
代表者	伊藤由布子
設立年月	2023年1月
住所	愛知県名古屋市中区新栄2-36-6
ホームページ	https://obashoku.crayonsite.net/
メッセージ	近所のおばちゃん達が立ち上げた子ども食堂の団体です。ぜひ私達の友達になって、楽しい時間を一緒に過ごしませんか？ 駄菓子屋さんも開催しています！

取組の様子





若者から高齢者がつながりを感じる 居場所づくりプロジェクト

愛知県瀬戸市

取組のかたち

自拠点で居場所を運営しながら、
地域に居場所を増やす活動

届けたい人たち

地域の子ども、
居場所を必要としている子ども、若者、高齢者
居場所をやってみたい高齢者、地域の人

私たちの軌跡

2004年に法人を設立し、現在の拠点に移って約10年になる。「みんなとみんな、心と心と、toの役割を果たしていきたい」と活動する中で多くの人たちとつながることができ、行政から地域の人まで様々な関係者と連携し、現在まで至る。具体的には、生活困窮者やひとり親の方に向けた食糧支援、子ども食堂の運営、外国籍の方に向けた日本語教室、その他困りごとの相談などを受けている。また市の財産である瀬戸市自然児童遊園「ねむの森」の指定管理業事をなども請け負っている。

私たちの新たな取組

私たちは孤立・孤独をなくすためには地域の見えない壁を取り払う必要があると考えている。そのためには、居場所が地域内にたくさんあることが望ましいと感じている。
本事業では、地域の人(特に高齢者)が自ら居場所づくりができるよう、居場所づくりのモデルを構築するため自拠点で居場所を運営した。また、地域に住む居場所づくりに興味を持っている高齢者の相談に乗るなど、居場所づくりの支援を行った。

小さな工夫が大きな変化を生んだ瞬間

居場所づくりに興味を持つ地域の高齢者に対してカウンセリングを実施したが、今年度中の居場所開設には至らなかった。しかし、自拠点で運営する居場所において、高齢者と子どもが交流できる場づくりを試み、より多くの方に訪れてもらうための要素は何かを検討した。具体的には、高齢者にはコーヒーやおつまみ、子どもたちにはお菓子やボードゲームなど、それぞれの来訪者が魅力を感じるものを居場所において提供した。また、様々な人が居場所を知り、訪れてもらえるよう、子ども食堂や他団体が行うイベント等において居場所の周知を行った。

地域のつながりの見直し

高齢者にはコーヒーとおつまみを用意し楽しく会話ができる場所として認識してもらえるようになり、居場所にも顔を出すようになり高齢者と子どものつながりもできた。また、子どもたちには学校が終わって楽しい場所があると思ってもらえるようになった。日常的に子ども同士がつながっている居場所となってきた。
居場所に参加してくれた高齢者の中には、自ら居場所を開けてみたいと興味を持つ方も現れた。

取組の成果

居場所では10月から参加者が増え、子どもから高齢者までの延べ400人以上が参加した。
また、本事業を通じて、居場所を運営するための方法や、人を呼び込むための様々なノウハウを作ることができた。それらを活かし、今後も継続して「自分の家や公民館等を利用して居場所をつくりたい」という地域の住民を支援したい。
また、別の事業で食料支援を行っているつながりも活用し、地域の中で孤独を感じていたり、孤立している人が自分の居場所を見つけることができるよう、支援していきたい。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人エム・トゥ・エム
代表者	服部悦子
設立年月	2003年12月
住所	愛知県瀬戸市菱野台4丁目4番地の3 菱野ウイングビルA-4
ホームページ	http://mtom.info
メッセージ	みんなとみんな、心と心、と、toの役割を果たしていきたい

取組の様子





地域に楽しみを創出し孤独・孤立から 繋がりを広げる居場所

一般社団法人
Pay for World
屋号 えがおの駄菓子屋

愛知県春日井市

取組のかたち

昔ながらの駄菓子屋の魅力を通じた
世代を選ばない地域の居場所づくり

届けたい人たち

多世代(高齢者・小中学生がメイン)

私たちの軌跡

えがおの駄菓子屋は、高齢者から子どもまでが集い、楽しみがありながらも、それぞれが自由に過ごせる、地域の繋がりを作る居場所である。茶話会、各種講座などを高齢者向けに定期的で開催しつつ、放課後時間などは小中学生も集い、それぞれが自由に過ごせる(宿題・ゲーム・ただ遊ぶなど)環境を産み出している。対象を絞らない、どの世代にもオープンな環境を作りだしているため、様々な出来事・相談・悩みが駄菓子屋に降りてきている。何かを出来るわけではない、ただ話を聞く、しかし必要があれば最後はしっかり支援機関に繋げる役割を担って活動をしている。

私たちの新たな取組

今回の事業では、昨年度に「点」で開始したことを「線」で繋ぎ、「面」での組織活動を作ること、いつも同じ顔がある環境になるようボランティアさんの固定化をすること、地域へ細かく深く情報を届けるために紙媒体での各種冊子などを作成することに取り組んだ。まだまだ知られていない方々への活動のお知らせと、点で活動している人たちを繋ぎ活動知見の共有や、繋がりを作り、将来的には資金面で草の根団体をサポート出来る中間支援組織となることを目指しながら、活動の輪を広げるための取組を行った。

共に進む仲間を作るための工夫

今事業の仲間づくりの特徴は2つある。一つ目は固定で来てくれるボランティアの方の募集、二つ目は同業の活動をしている団体との接点、グループ作りである。ボランティアの募集はSNSと紙媒体での募集が基本となった。いつも同じボランティアが居る事で、地域の方に安心と相談しやすさや話しやすさを感じていただくことができ、利用数の増加に繋がっている。二つ目の他団体との連携は、足で稼ぐ必要がある。同じような強い想いを持ちながら、一人・一団体のみで活動し、同じ想いで苦勞している方が多くいる。その方々に、連携してもよい形を提示して繋がっていただけないかと尋ねていく姿勢が必要となる。

取組の成果

固定で来てくれるボランティアが5名、ボランティア登録数は20名にもなった。ボランティアの固定化のおかげで、居場所の開所時間が一日数時間(夕方以降)拡張された。また、他団体との連携作りでは「IBASHO Station」を立ち上げ、愛知県を中心に、沖縄・静岡など含めて現時点で42の団体・法人・個人が参加している。これらの団体を集めたシンポジウムも二回開催し、それぞれ30人以上が集まった。紙媒体での地域への告知も、当団体を知らなかった方も含め、より多くの方に知っていただくきっかけとなり、居場所に足を運んでもらえた。今後、毎月地域新聞などを発行する予定。

団体概要

団体名	一般社団法人 Pay for World 屋号「えがおの駄菓子屋」
代表者	毛利 規寛
設立年月	2020年10月
住所	愛知県春日井市岩成台 6-2-3 21-103
ホームページ	https://payforworld.org/
メッセージ	昔ながらの駄菓子屋の魅力を通じて多世代が集い、支えあう「みんなのもう一つの家になる」をコンセプトに活動しています！

取組の様子

ご支援の流れ (個人サポーター)

QRコード読み取り → 会員登録 → 入金 → 商品受け取り

ご支援の流れ (法人サポーター)

会員登録 → 入金 → 商品受け取り

ご支援プラン (個人)

500円 / 1,000円 / 3,000円 / 5,000円

ご支援プラン (法人)

10,000円 / 20,000円 / 50,000円 / 100,000円

えがおが生まれる居場所をあなたと共に育む。

地域の居場所を支える企業・個人サポーター「えがおクルー」募集!

みんなのもうひとつの家になる

子どもに生きる力を、高齢者に充ちる。あなたの支えが次の「えがお」を創ります。

えがおの駄菓子屋

2024年は累計で14,919人が「えがおの駄菓子屋」で笑顔を見ました。子どもは数や先生以外の人の笑顔の中で、多感な年齢ならではの心と向きあう力を育き、高齢者は楽しい事に溢れる、経験できる居場所から学びます。

世代を超えて支えあえる居場所としてだけでなく、地域のお祭りや月1回のイベント、企業共創、行商との連携を通じて、地域のつながりを育んでいます。このみんなの居場所を一緒に支え、未来に向けて持続可能な地域社会を創り育みます。

代表メッセージ

「えがおの駄菓子屋」は、人口減少と高齢化が進む日本で、未来の子どもたちのために何を残すべきかを問いかけた答えから生まれました。偏狭な環境で感じたのは、人と人の繋がりが未来を支えるということ。昔ながらの駄菓子屋が、世代を超えて支えあえるもう一つの居場所になれば、豊かで持続可能な地域社会を創ることが出来ます。この温かい繋がりを日本中に広げていくには誰かがやるのではなく、地域のみんなで作ることです。子ども達が生きる未来の地域社会のために、ぜひ「えがおクルー」として共に歩んでください。

一般社団法人Pay for World 代表理事 毛利規寛

えがおの駄菓子屋 新聞 3月号

今日も誰かの「お祭り」と「たぐいまる」聞こえる「みんなのもう一つの家になる！」「えがおの駄菓子屋」での日々の出来事、地域の情報、イベントなどの地域だけの情報新聞!

えがおの駄菓子屋新聞創刊!!

えがおの駄菓子屋新聞創刊!!

岩成谷の小さな駄菓子屋「えがおの駄菓子屋」! でも、ただ駄菓子売っている場所ではありません。学校帰りの子どもたち、散歩の途中に立ち寄るおばあちゃん、顔のほころびを待つ子どもの居場所など。この新聞は、えがおの駄菓子屋で起きた「特別なけれど、大切な日常」をそのままの言葉で届け、地域の様々な日常を発信する新聞です。

今月の「えがおの駄菓子屋」!!

今月の子どもからの手紙は「ぶっくらしん」!! 皆様、今これが大流行してのお店でも品薄なのはご存じでしょうか? このシールの最初の流行は2000年前後。そして2024年から徐々に流行が始まり、そこに平成時代のアイテムで更に火が付きました! 女子の間でシール交換して遊ぶ事が流行しています! いつも行く駄菓子屋さんに時々ありますが、大株売り切れ! もしあったら必ず買います!... あったら...

駄菓子屋って?

1970年代には13万件あった駄菓子屋さんも、少子高齢化と儲からない売上のイメージから、2021年に6千件まで減って以降アタが存在しません。でも、多くの人の記憶に駄菓子屋さんは存在しています。それは、初めてお金を握りしめて社会との接点や地域の繋がりを覚える居場所だったからじゃないでしょうか? 今、全国で駄菓子屋さんが生み出す繋がりが再認識され、地域の繋がりを生む駄菓子屋×居場所が出来始めています。えがおの駄菓子屋も、この岩成谷に地域の高齢者から子どもまでが集える居場所を作りたい思いから始まりました! 2023年12月にオープンして2年、これからもよろしくお願ひします。

おすすめ駄菓子!

ハズレがないそう言い切るゴルドチョコ、ハズレいけどさ...

月一回、みんなで懐かしの映画を見よう!

毎月一回昭和の懐かしの映画上映会を開催しています。青春時代に見た若き日の石原裕次郎や、今じゃ考えられない価値観のオンパレード。当時は普通だった職場での喫煙、〇ハラ、ビンタ、などなど若い世代が見ても勉強になります。今の価値観で観てはいけない者の価値観。時代は変わりましたが、なんかええ、あの時代の本音で語れる人情も別に悪くないですよ。10時半から開催、日程はカレンダー参照してください。事前予約になりますので、お気を付けてください。

銀座恋物語

Instagramはこちら

毎週土曜日は健康麻雀教室開催!!

毎週土曜日は健康麻雀教室の日。みんなでワイワイ、勝負というよりも「こんな時どうするの?」といった教えあう様な初心者向けの教室です。最近は、子どもも来てくれて一緒に楽しんでいます。卓が2台しかないのに混雑時は交代制で楽しんでもらっています。是非、覗きにきてください!





空家再生型メンズシェッドとおやじ講を 融合させた孤独・孤立対策

特定非営利活動法人
しんしろドリーム荘

愛知県新城市、静岡県
浜松市、湖西市

取組のかたち

地域の課題への取組を通じたつながりづくり

届けたい人たち

地域に気に入った居場所がない
高齢男性

私たちの軌跡

子ども福祉事業:「不登校・いじめ対策の合唱団活動」、「貧困連鎖を断つプログラミング無料塾」、「音楽セラピー体験教室」、「親子で学ぶお金の講座」
勤労者福祉事業:「障害者職業能力開発PC講座」、「DX対応リスキング研修」、「フォークソングで町興し」、「しんしろ軽トラ市の開発」、「新城市情報センター指定管理者」
高齢者福祉事業:「コミュニティー・サロンでの歌声喫茶、囲碁将棋ご会所、自立体操など」、「介護施設利用者満足度調査」、「介護施設管理者研修」、「高齢男性の孤独・孤立対策の新城メンズシェッド」

私たちの新たな取組

新城メンズシェッド(以下、'MS' と称す)の拡充:「おもちゃの病院」、「アサギマダラの里」を展開する。
行政への施策提案: 行政との連携を深め、転入者へのMSの広報など、孤独・孤立対策の啓発を図る。
全国とのつながりを拡大:「日本コミュニティーシェッド協会」と連携し、全国への波及を図る。
全世代とのつながりを強化: MSが世話人となり多世代の交流を促進する。
エビデンスを固め活動の品質を向上: 高齢男性の孤独・孤立対策のシステムを構築するために、社会実験をもとにエビデンスを固める。

男性も気軽に立ち寄れる居場所を！

本年度の活動で明らかになったMSに高齢男性が集まる理由
プライド・マネジメント: 支援される場ではなく、自身が支援する場とすることや、自らの行動が地域を活性化させることを自覚し満足感を得てもらうことで、高齢男性のプライドをうまくくすぐる。
三世代を包み込む力: 三世代交流の場にするすることで、ジイジとしての役割が発揮される。
若い者の世話にはならないという気概: 孤独による介護・医療費の増加を防ぐという気概が働いた。
「気の置けない仲間」が集う: MSを利用する者同士が仲間となることで、満足感が生まれた。

地域に吹く新しい風

海外からの風: 昨年米国医務総監の視察に加え、東北大学を通じて英国ノッティンガムトレント大学との共同研究が開始するなど、海外からの風が地域に吹いている。
多面的な風: MSを訪れた、愛知大学教授、愛知学院大学教授及び学生、東北大学教授・特任教授、大阪桐蔭高校3年生、NHK名古屋記者等、MSをきっかけに多面的な分野の風が吹き、つながりができた。
三世代交流の風: 三世代交流の風を吹かせることで、孫世代を要とした世代間のつながりの場を演出できた。

取組の成果

多主体交流について：東北大学大学院、大阪桐蔭高校生、NHK名古屋等が当団体会議室に集まり、MSの現状を共有するなど、MSを通じてつながりができた。

孤独・孤立対策のエビデンスについて：東北大特任教授のもと、MSを活用する高齢男性8人にインタビュー調査を実施し、現状分析を行い、今後の活動への指針を得た。

多世代交流について：MSを活用するジイジ主催の交流会を実施し、子ども3歳～18歳23名、親世代34名、シニア15名の計72名が参加。親世代が子ども化し、孫世代も心置きなく楽しむ様子が確認できた。

団体概要

団体名	NPO法人 しんしろドリーム荘
代表者	山本 拓哉
設立年月	2005年4月
住所	愛知県新城市豊栄439-2
ホームページ	http://dreamso.jp
メッセージ	社会から取り残されている人が、ひとりでもいると気になって仕方ない、そんな気の置けない仲間が集う団体です。ご連絡をお待ちします！

取組の様子



「なにかしニャー!」と考えている
特に「オジサン」へ
～地域づくりの助っ人 募集～
無期限、ノルマなし、報酬はみんなの笑顔
費償元：NPO法人しんしろドリーム荘 後援：新城市(申請中)

こんなことを **お願い** してきませんか？

- 1 空家、空き倉庫をつかって集まる場所をつくる
- 2 おもちゃの病院で子どもをよるこぼせる
- 3 リユース小屋でもったいないマッチング
- 4 アサギマダラを呼ぶ花と蝶のまちづくり
- 5 川魚一杯会、ハルーンアートなど、アイデア募集中

どこの誰でもOK、暇つぶしてOK、とにかく家から出る目的をたくさん作ろう！
自分で立ち上げる方には、面倒な事務などをサポートします。

<実績>
・「空家再生型メンズシェッド(男の小屋)」内閣府委託
・新城メンズシェッドで八名井の炭焼小屋・古民家再生中
・新城駅前倉庫を改築し音楽ライブ会場を創設
・東新町駅前「うたごえサロン」火・木 10時から

お問合せ：NPO法人しんしろドリーム荘
<https://dreamso.jp>
〒441-1361 愛知県新城市平井字番形 1-3 コーポラ1階東
TEL: 0536-22-0802 FAX: 0536-28-0493
info@dreamso.jp

このチラシは、内閣府「地域における孤独・孤立対策」に関するNPO等の取組モデル調査研究業務にて制作しています。 2026.01.01

転入者向け公募チラシ



取組のかたち

つながりの場づくりと
理解促進

届けたい人たち

主に町内もしくは町外のわんずスペースの
活動(孤独・孤立予防の活動)を知らない人

私たちの軌跡

令和5年度「玉城町つながりプラットフォーム事業」からスタートした居場所活動(空き家を活用したフリースペース、SNSを活用したフリーチャット)で日常的な孤独・孤立の予防活動を展開している。

私たちの新たな取組

固定の居場所である「わんずスペース」を訪れることが難しいターゲット層(子育て世代、子ども、高齢者、障害者など様々な状況で孤独・孤立を感じている人)に対して、事業を認知してもらい、居場所への参加のハードルを下げることを目的として、地域に出向く「おでかけわんずスペース」を実施した。この他、他団体が開催するマルシェなどのイベントにも参加することで、活動の周知を行った。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

2年前から空き家を活用した誰でも来れる居場所づくりを続ける中で、安心して話ができる場を求めている方が多いこと、また、居場所につながると安心して自分のことを語ってくれる方がいることを知ることができた。しかし、知らない場所に行くことに関する不安等があると、居場所につながらないこともある。そこで、まずはこのような活動の場があることを知ってもらうとともに、雰囲気などを実際に感じてもらえるよう、支えを必要としている人の元へ出かけて行くことを決めた。

つながりを力に一連携の工夫

「おでかけわんずスペース」を開催するにあたり、地域の自治会や児童館等と協力し、場所の確保を行った。また、活動する中で知り合った「美容ケア」と「ボイストレーニング」の講師と協力し、これらをテーマとしたイベントを開催した。さらに、他団体が行う不特定多数の方が集まるイベントに参加させていただき、「わんずスペース」の周知等を行った。このように、様々な団体等と協力して「おでかけわんずスペース」の開催や活動の周知を行うことで、地域における孤独・孤立対策に対する理解の広がりにつながった。

取組の成果

今回の活動の中で、単なる支援の場ではなく、安心して過ごせる「居場所」の必要性を広く伝えることができた。また、「おでかけわんずスペース」に参加いただいた子育て中の方から、家庭の状況などをスタッフが個別に相談に乗ることもあり、通常の「わんずスペース」の案内もできた。今後も居場所へつながるきっかけとして継続していきたい。

- ・おでかけわんずスペース開催回数： 7回(うち4回はテーマを決めたイベントを実施)
- ・イベントへの参加回数： 5回

団体概要

団体名	特定非営利活動法人わんず
代表者	栃本 明子
設立年月	2020年1月14日
住所	三重県度会郡玉城町田丸176
ホームページ	http://www.facebook.com/Onestamaki/
メッセージ	「この場所がないと困る」の声に背中を押されます。 それぞれの活動が誰かのためになることを信じて、頑張ってください！

取組の様子



8.20(水)下田辺公民館
8.22(金)小社公民館
8.27(水)蚊野公民館

10時～12時開催



2026
(木) 1/11

時間：10:00～12:00
会場：梅が丘見晴
参加費：無料
定員：5名

※事前の予約はありませんが、ない場合があります。
主催：特定非営利活動法人わんず



↑イベント参加の様子



おでかけわんずスペースの様子





取組のかたち

居場所づくり
働くことを通じたつながりづくり
地域の課題への取組を通じたつながりづくり

届けたい人たち

多世代
ひきこもりの状態にある人など

私たちの軌跡

当法人は、障害がある等の理由で生きづらさ・働きづらさを抱える人等(以下「当事者」という。)や障害者就労支援事業所等に対して、就労支援や事業所等における経済活動の活性化、様々な関係機関・団体等とのネットワークの構築に関する事業を行っている。

具体的には、県内の障害者就労支援事業所等に向けた事業、行政機関からの委託事業(重層的支援体制整備事業の参加支援事業や生活困窮者等の就労準備支援事業等)、様々な関係機関・団体等の事務局等を担っている。

私たちの新たな取組

令和6年度より、当事者向けに「ゆかい家」(草津学区社会福祉協議会が運営する地域カフェ)で居場所づくり(軽作業の提供、居場所の提供)を行っており、令和7年度は、以下の新たな取組を実施した。

- ①当事者に活動を知ってもらうため、YouTubeにて活動の配信を行った。
- ②地域の人達に知ってもらう、また自分たちも地域のことを知るため、地域のイベントに参加し、販売会を行ったり、困りごとの解決の一助を担うため、地域の人達に向けたスマホ教室を開催するなどした。
- ③毎週火曜日に当事者が担い手となり、お守り作製の内職を行った。

つながりを力に一連携の工夫

令和6年度に引き続き、学区社協と連携を図って取組を行った。学区社協が持っている既存のネットワークを活用させていただいた結果、新たな取組②のとおり、たくさんの活動を行うことができた。

また、ひきこもり等の様々な生きづらさを抱えた人達でつくる当事者団体とも、令和6年度に引き続き、連携を図り、新たな取組①のとおり、YouTubeでの生配信を行った(配信:1回、同時視聴の最大者数:7名、アーカイブの再生:51回)。配信にあたってはたくさんのアイデアを提供いただき、また一緒に試行錯誤しながら企画を作ることができた。

継続は力なり

令和7年7月より新たな取組③のとおり、毎週火曜日は当事者とお守り作製を行った(実施:26回、延べ参加当事者:85人)。毎週、顔を合わせる中で段々と雑談も増え、コミュニケーションの場となった。

その結果、新たな取組②のとおり、地域のイベントと一緒に参加し、販売会を行った(実施:1回、参加当事者:2名)。また、学区社協野菜市の補助地域の人達に向けたスマホ教室を開催することができた(実施:1回、参加当事者:2名、地域住民:15名)。

運営側も利用者も継続して、お守り作製を行うことができたことで、一緒に活動する範囲の幅が広がった。

取組の成果

お守り作製や、令和6年12月から行っている週1回の居場所の提供(実施:52回、延べ参加当事者:192名)および月1回の野菜市の補助の有償ボランティア(実施:12回、延べ参加当事者:18名)などを通じて、当事者の人達とのコミュニケーションを図ることができた。その結果、一緒に多くの活動をする事ができた。また、継続して活動していることや、活動の幅が広がったことで、人伝えに段々と活動を知ってもらえるようになり、他の支援機関から活動に関する問い合わせが増えている。今後の目標としては、この取組を継続することを大事にしながら、更なる活動の場を広げていきたい。

団体概要

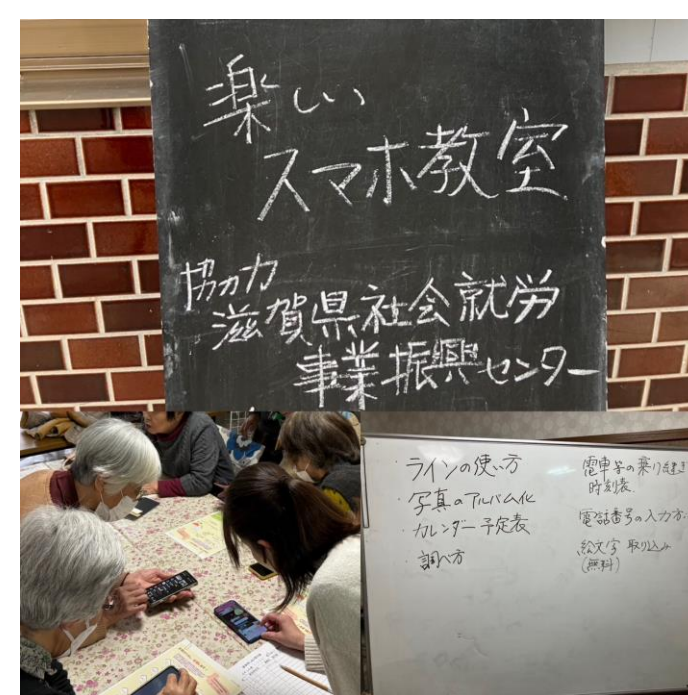
団体名	NPO法人 滋賀県社会就労事業振興センター
代表者	理事長 城 貴志
設立年月	2013年3月(社団法人の設立は、1998年10月)
住所	滋賀県草津市大路二丁目-11-15
ホームページ	https://hataraku-shiga.net/
メッセージ	令和6年度の取組を継続した結果、令和7年度は活動の幅を広げることができました！毎週のお守り作製や居場所の提供を継続できたことが活動のベースにあると思っています(継続は力なり！)。

取組の様子



生配信の様子

販売会の商品



スマホ教室の様子



買物困難や交通不便を補う地域社会システムの立ち上げ活動（ステージ2★★）

社会福祉法人
光養会

滋賀県高島市

取組のかたち

移動手段を通じたつながり
交流の場づくり

届けたい人たち

一人暮らし高齢者
高齢者世帯

私たちの軌跡

私たちは、特別養護老人ホームふじの里（従来型40床）、特別養護老人ホームふじの里なごみの家（ユニット型40床）、特別養護老人ホーム藤のれん（ユニット型40床）、特別養護老人ホームふじの里ショートステイ（20床）、ふじの里デイサービスセンター（定員25名）、ふじの里ケアプランセンターを運営している。また、地域における公益的な取組として、子どもの夜の居場所として「フリースペースふじの里なごみの家」、中学生の学習支援の場所提供、自治会に加入されていない方のサロン「ふじカフェ」、ふれまち地域交流事業などを高島市、高島市社会福祉協議会、安曇川住民自治協議会と連携・協働して実施している。

私たちの新たな取組

当法人の位置する高島市安曇川町の高齢者の移動手段等の調査を行うとともに、交通不便がある高齢者等に週1回程度、法人の福祉車両を活用した移動支援を行い、人と社会をつなぐ取組を行った。今年度は、昨年度からの移動支援の活動に加え、移動手段がなく困っている高齢者を対象に、地域のサロンや居場所への送迎、交流活動の実施サポートを行った。活用する福祉車両の前後左右4箇所に「ふれまち交流バス」のマグネットシートを取付け地域内を運行、利用者には「ふれまち交流バス乗車券」（氏名、移動先、緊急連絡先を記載）を発行し、地域内での周知や利用者が安心して利用できる環境づくりにも取り組んでいる。

共に進む仲間を作るための工夫

高島市、高島市社会福祉協議会、安曇川住民自治協議会などの関係機関・団体が実施する会議や研修をはじめ、多様な活動の場に参画し、分野を超えた連携を推進している。また、法人・施設の資源を地域に利活用してもらうために施設を開放し、法人・施設の認知度向上と関係性の深化を図っている。課題解決にとどまらず、「取組そのものの楽しさやおもしろさ」を関係者が共有・共感し、他の活動とも連動させることで、移動手段を通じたつながり・交流の場づくりに関わる人を増やしている。多様な主体が行う複数の既存事業をつなぐことで、事業の継続性が高まるとともに、実施主体間にもより強固な信頼関係が構築できている。

取組の成果

ふれまち交流バスの運行ステージ2★★として買い物支援に加えサロンの送迎、活動支援（毎週1回）を新たに実施した。これにより事業の認知度が向上し、利用者の増加につながるなど取組が進展した。定期運行に加え、臨時運行も行うことで、多様な活動の場への送迎、交流も幅広く提供できた。さらに、利用者の生活・心身の状態に応じて地域包括支援センターや居宅介護支援事業所とも連携しながら支援を行った。今後の目標として、高島市や他法人とのさらなる連携を図るとともに、参加が少ない男性高齢者に着目し、男性の社会参加やつながりづくりを促進する活動の場づくりに取り組みたいと考えている。

団体概要

団体名	社会福祉法人 光養会
代表者	理事長 澤 和記
設立年月	1992年8月
住所	滋賀県高島市安曇川町下小川3220番地1
ホームページ	http://kouyoukai-fujinosato.jp
メッセージ	ふれまち交流バスの運行ステージ3★★★に向けて、皆さんと共に、これからもふるさと(人)のために行動し続けていきます！

取組の様子



ふじの里地域交流事業で事業・車両紹介



ふれまち交流バスの送迎



交流バス乗車券



地域のサロンで交流



ふじの里で交流(ふじカフェ)



取組のかたち

多様な人々が訪れ、出会い、
関係が生まれ育まれていく場づくり

届けたい人たち

さまざまな背景をもった
多世代・多分野の人たち

私たちの軌跡

滋賀県高島市は、人口約45,000人、高齢化率38%を超える広域自治体である。ぼくみんは、出会いや対話を軸に、地域福祉や地域づくりに関わる人や組織のつながりを育んできた。2022年より高島市と関わり、介護サービス事業者協議会との協働で多世代・多分野交流の対話型イベント「未来のジャム」を実施するとともに、複数の社会福祉法人与「高島ふくしデザインセンター構想(仮称)」に取り組んでいる。また、本を媒介としたイベント「たかしまサーカス」や出版事業「ぼくみん出版会」も主宰している。2023年2月には、JR新旭駅前に「TAKASHIMA BASE」を開設し、日常的な出会いや関わり合いが生まれる場を整えてきた。

私たちの新たな取組

古民家をリノベーションして開設した地域ケア拠点「TAKASHIMA BASE」は、これまで非定期で運営してきたが、2025年10月より、書店・リソグラフ印刷・カフェからなる複合的な空間として週4日オープンしている。書店に並ぶ約1,000冊の本を通じて、誰もが日常的に訪れ、相互受容の環境を育む「本のある居場所」をひらく。また、読書会や、リソグラフ印刷の活用を通じて、住民同士がゆるやかにつながる機会をつくる。運営は20代の若者が事務局を担い、地域の社会福祉法人与連携しながら、年齢や障害をこえた社会参画や地域包括ケアにつながる入口を担う。

つながりを力に一連携の工夫

「TAKASHIMA BASE」には、以前からつながりのあった方々に加え、主婦や家族連れ、仕事帰りのサラリーマン、観光者など、さまざまなバックグラウンドをもつ人の出入りが生まれ、月間300名を超える来訪がある。スタッフは来訪者一人ひとりと丁寧にコミュニケーションをとり、その立場や背景を理解したうえで、来訪者や関係者をつなぎ、活動のきっかけをつくっている。住民自治協議会や、市民協働交流センター、社会福祉法人との連携が深まったり、ボランティア講座や事業所ワークショップでの会場利用や、マルシェ出店などの機会が出てきたりなど、まちの担い手や事業者との連携も生まれている。

“来る人”から“関わる人”へ

来訪者の一部の方は通い続けるようになり、この場の担い手へと変化していった。「TAKASHIMA BASE」では、日常を豊かにするイベント「BASE DAY」をはじめ、さまざまなイベントを開催している。関わりが深まりつつある方々に、イベントをつくるプロセスに参加いただくよう呼びかけ、場への参加をデザインし、その方々にとってやりたいことにチャレンジしたり、仲間が増えたりする機会をつくっている。書店の本棚づくりには、仕事帰りに手伝いに来る方や、夕食を提供してくださる主婦などが出入りした。市内外の20代の若者が多く集まっているのもこの場の特徴のひとつになっている。

取組の成果

本のある居場所づくりを軸に、2025年10月から週4日の常設運営とした。9月までは非定期運営で来訪者数は月平均54名であったのに対し、10月～1月は月平均319名(月間272名～423名)が来訪した。多様な人々が集う場となり、孤独・孤立の予防と早期対応の入口となる拠点を形成した。運営には有給スタッフ2名に加え、地域縁のある20代13名、大学生・専門学生4名、高校生1名の計20名が関与し、年齢や立場を越えた社会参画の機会を広げた。さらに、読書会2回(計18名参加)とZINEと呼ばれる自主制作冊子(計10冊発行)を通じ、対話と表現の機会を生み、地域住民の相互理解と文化的多様性の向上につなげた。

団体概要

団体名	一般社団法人ぼくみん
代表者	今津新之助
設立年月	2023年4月(活動開始年月:2019年10月)
住所	〒520-1501 滋賀県高島市新旭町旭870-7 TAKASHIMA BASE
ホームページ	https://bokumin.jp/
メッセージ	TAKASHIMA BASEは、京都駅から琵琶湖を眺めながら45分。JR湖西線新旭駅から徒歩1分にあります。周りは自然豊かで、いいところです。ぜひ一度、遊びにいらしてください！いろいろとご一緒できればと思っております。

取組の様子

BASE BOOKS

2025.10.10.FRI OPEN

高島で本屋さん、はじめます。
週刊誌はありません。コミックもありません。
ちょっと変わった本屋さんです。
だけど、よりよく生きるBASEとなる本や
たまたま手にとったら「！」に出会える
旅の入口のような本を揃えました。

TAKASHIMA BASE
520-1501 滋賀県高島市新旭町旭870-7
JR「新旭駅」から徒歩1分
Instagram @takashima_base





AI Botを活用した移民ルーツの若者の セーフティネット構築事業

特定非営利活動法人
immi lab

滋賀県東近江市、
湖南省、甲賀市など

取組のかたち

AI技術を活用したつながる仕組みの構築

届けたい人たち

移民ルーツを持つ若者

私たちの軌跡

NPO法人immi labは移民ルーツを持つ15～25歳の若者のレジリエンス(困難を乗り越える力)を育てる伴走事業「プロジェクトポンテ」を滋賀県で実施してきており、これまで120名以上の若者たちと関わってきた。令和6年度には対面での提供内容を充実させ、進学率の向上などの成果を実現することができた。一方で、活動の拡大に伴い、伴走と対話を重視するプロジェクトポンテでは対応しきれないほど、繋がりを必要とする移民ルーツの若者がいることが明らかになった。より多くの若者を支援するため、移民ルーツを持つ若者のキャリアサポートを目的としたチャットボットの開発も水面化で進めてきた。

私たちの新たな取組

本事業では、開発を進めてきたチャットボット「vai vai chat」(ヴァイヴァイチャット)をより多くのユーザーに使ってもらうことで、vai vai chatをさらに普及させるための戦略立案を実施し、地域でのセーフティネット構築の一助として活用する可能性を模索することを目指した。滋賀県内での大型イベント内でのポップアップ体験会や学校訪問を通して96人の新規ユーザー登録と活用につながり、vai vai chatのブランディングとマーケティング戦略立案を完成させた。また、今後のツール運営財源を確保するための収益化方法を検討するため、関係者との意見交換も実施した。

うまくいかなかった時の工夫と試行錯誤

vai vai chatのユーザーが移民ルーツコミュニティ、特にまず対象としたブラジルなどのラテンアメリカルーツの人々である反面、当法人の連携先は日本の一般的な組織や個人である。そのため、言語の違いに加えて根本的なマーケティングやブランディングのアプローチが異なることが判明し、どのように戦略立案するか、関係者間での合意形成に時間がかかり、マーケティング業務委託契約締結を何度かやり直すこととなった。しかし、そのプロセスは必ずしもネガティブものではなく、議論を通して団体として本事業にかける思いや目指す社会像をより言語化することができ、数年後の未来における団体の役割も明確化できた。

“ここがポイント！”現場発の知恵

immi labがこれまでの事業で築いてきた、地域での若者ひとりひとりへの丁寧な伴走と、コミュニティに深く根差したアウトリーチは組織としての強みである。そうした強みをよりvai vai chatの普及に活かすためには、まずは移民コミュニティからの信頼と評価を獲得することをマーケティング方針の軸に置いた。結果、新たに公開したランディングページのデザインや表現はポルトガル語・英語向けに最適化された。これは、移民コミュニティ内の企業や個人と互いに信頼し協働することで実現できた。行政や他団体との対話の中でも、当団体がもつコミュニティに関する深い理解が評価されているため、この軸を忘れず継続していく。

取組の成果

成果として、vai vai chatのブランディング確立、今後の普及方針の確定、96人の新規ユーザー登録を通じたコミュニティへの理解促進が達成できた。
デジタル上での素材準備は完了したため、今後は滋賀県近辺の地域(三重県や岐阜県など)にも活動範囲を広げ、移民ルーツの若者が多く集まる場を活用してキャリアワークショップと連携させたvai vai chat体験会を実施したり、コミュニティ内のメディアとの連携を通じた口コミでの普及を展開する。
2026年度中に1000名のユーザー登録を目指し、データ分析と可視化の体制も整備していく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人immi lab
代表者	北川ペドロソ 実萌
設立年月	2020年1月(法人登記2024年11月)
住所	京都市伏見区山崎町367
ホームページ	http://www.immilab.org
メッセージ	このような挑戦的な事業へもサポートを提供していただき、ありがとうございました。 引き続き、大きなインパクトに繋げるため尽力していきます！

取組の様子





取組のかたち

地域に暮らす多様な人々が
孤立せずゆるやかにつながり合える
「カフェ型居場所」の運営

届けたい人たち

独居高齢者／子育て中の親(特にひとり親)／
ひきこもりがちの若者や中高年／障害・精神疾患
等により孤立しがちな人／なんとなくしんどい…
を抱えた「名もなき当事者」／保護観察対象者

私たちの軌跡

私たち京都わかくさねっとは、生きづらさを抱える少女たちが、まずは「安全・安心な環境の中で自分の居場所を持つこと」を大切に活動してきた。少女たちが、守られる存在にとどまらず、役割や言葉を取り戻して社会と関わっていくことを目指している。

2024年度は、少女たち自身が居場所のあり方を模索し、安心して関われる関係性の土台を整える一年であった。2025年度はその土台を生かし、地域の人たちの協力を得ながら、週3回の居場所運営や地域行事への参加を開始した。「少女の居場所づくり」の取組が、「地域を育てる循環」へと発展している。

私たちの新たな取組

「わかくさカフェ」を運営し、週3日、誰もが自由に立ち寄れる居場所を開放する取組を実施。地域の人たちがふらっと訪れ、食事や作業を共にしながら関係を築く中で互いに、もしくは自分自身で困りごとに気づき、対応につなげる場となるよう運営している。そこで、週2回はアートに取り組める時間を設ける、月曜日には相談支援の専門職が駐在するなどして、居場所の質を高めている。カフェでは300円で手作りの食事を提供し、支援が必要な人には無料で食事を提供している。

地域から孤独・孤立をなくすことを目的とした、日常にひらかれた居場所づくりを目指している。

共に進む仲間を作るための工夫

アプローチしたい対象の方とつながるために、どこでどのように周知を行うか、徹底して工夫した。例えば、困窮世帯の方々へのアプローチでは、生活困窮状態の方が頼ることが多い施設(例えば隣保館)の協力を得て周知を行った。また、連携の面では、子どもから大人まで安心して利用できる居場所づくりを進めるため、行政の子育て支援課や社会福祉協議会との連携にも努めた。

周知や連携に加え、来訪した人々を属性や困難さで判断しないこと、ラベリングをしないこと、居場所から誰も締め出さないことを基本姿勢としてきたことも、多くの人々の理解と共感を得る上で重要であった。

取組の成果

本事業を通じて、少女たちが地域に関わることで、地域の人々がその姿に共感し、少女たちとの関わり方や少女たちに向ける意識が変わるといった循環が生まれた。地域の人々の変化を目にした少女たち自身も、「自分も地域の一員である」という実感を持ち、人と関わる自信を深めていった。その結果、居場所は「支援を受けるための場」から、「互いに役割を持ち支え合う場」へと変化した。

人の変化が場を変え、場の変化が地域の関係性を変えていく。この循環が生まれたことが大きな成果であると考えている。

団体概要

団体名	一般社団法人 京都わかくさねっと
代表者	齋藤 常子
設立年月	2018年12月
住所	京都府京都市左京区田中西浦町19
ホームページ	https://kyotowakakusa.net/
メッセージ	人は誰でも変われる、そして大きな可能性を秘めている！

取組の様子

